

#### 登場人物

- ・シズカ（主人公）＝高校生、いじめられっ子
- ・カズ＝シズカの友達
- ・シュウヤ＝シズカの同級生、いじめっ子
- ・マリ＝シュウヤの取り巻き
- ・リコ＝シュウヤの取り巻き

#### 記号

○ 場面や時間の説明

― 状況や人物による行動の説明

M 人物の心情

#### ▼シナリオ

○高校の教室の中

―教室の席に座って授業を受けているシズカ

シズカM『私の名前はシズカ、都内の学校に通う高校二年生。お父さんが借金で蒸発してしまって、今はお母さんと二人で暮らしている。性格は周りの人と比べると暗い、かな。よく根暗って言われる。この性格のせいで友達も一人くらいしかいない。趣味は読書で、休日によく家で本を読んでも。』

―HRが終わり学校から出ていくシズカ

○街中の道

―道路を一人で歩くシズカ

シュウヤ「おーい、シズカ」

―後ろからシュウヤが声をかける。シズカが後ろを振り向くとシュウヤやマリ、リコがいる

シズカ「な、何でしょうか？」

―腕を組むマリとリコを映す

マリ「なにその嫌そうな顔？せっかくアタシらが声かけてやったってのに、失礼じゃない？」

リコ「そうそう。ホントなら独りぼっちのアンタのわざわざ声かけてやったんだから、感謝しなさいよね」

シュウヤ「まあ二人とも、そう言うなって。俺ら友達なんだから、なあシズカ。」

ーへらへら笑って近づいてくるシュウヤのアップ

シズカM『彼はクラスメイトのシュウヤさんとマリさん、リコさんだ。毎日のように私に絡んできて、暴力をふるったりお金を取ったりする。友達なんて言ってるけど、要はただの言いなりに近い』

シュウヤ「俺らこの前派手に遊びすぎちゃってさ、金欠なんだよねえ。友達の俺らに金恵んでくんね？」

シズカ「そ、そんな...この前1万円貸したばかりで...」

シュウヤ「そう言うなよお。また今度まとめて返すからさ」

ーシュウヤに肩を掴まれて、困った顔をするシズカ

シズカM『こんなことは言っているが、いつも半ば強引にお金を取って、彼らが私にお金を返した覚えがない。』

シズカ「きょ、今日は無理ですよ。そんなに大金持っていないんですから...すみません」

ーその場を立ち去ろうとするシズカを両脇から挟み込むリコとマリ

リコ「あれえ、そんなこと言っているのかなあ？」

マリ「持ってる分だけでもいいからちょうだいよお」

ーリコとマリに迫られて怯えるシズカ

シズカ「ほ、本当に困るんです...きゃっ！」

ーリコとマリに裏路地に突き飛ばされるシズカ

マリ「この根暗女が！黙って金渡せばいいんだよ！」

リコ「ねえシュウヤ、私らが押さえつけとくからお金取っちゃいなよ」

シュウヤ「OK、騒がれても面倒だしちゃんと押さえとけよ」

ーマリとリコがシズカの腕を押さえて、シュウヤがシズカの懐に手を伸ばす。

シズカ「や、やめてください！」

マリ「動くなって言ってるでしょ！」

シュウヤ「お、あったぞ」

—シュウヤがシズカのポケットから財布を抜取る

シュウヤ「さてと中身は...って三千円しかねえじゃん」

リコ「ええ、全然入ってないじゃん。叩いたらもう千円ぐらい出てくるんじゃない？」

マリ「それ名案じゃん！ほら、とっと金出せよ！」

—シズカに手を上げるマリ

シズカ「きゃっ！ほ、本当に...これ以上は持っていないです」

リコ「何それえ、これだから貧乏人は」

マリ「借金男の子どもの財布なんてそんなもんでしょ。よくこんなはした金持って歩けるわね」

—シュウヤがシズカのお金を抜き取って財布を投げ捨てる

シュウヤ「ちっ！このド貧乏が。今度痛い目見たくなかったらもっと多めに金入れとけよ。行こうぜ」

—シズカを置き去りにして帰るシュウヤとリコとマリ

シズカM『いつもこんな風に暴力を振るわれて、お金を奪われる。それが私の日常だ。本当はやめてほしいけど、私一人じゃどうしようもできないし、学校に相談すればお母さんの耳にも届く。お母さんに心配かけるわけにもいけないから、結局誰にも話せていない。本当、どうしようかなあ』

—裏路地を出て歩くシズカ

カズ「あれ、シズカさん？何やってるの？」

—後ろから声をかけられて、振り向くとカズがいる

シズカ「あ、カズさん。」

シズカ「奇遇だね、こんなところで...って、口に咥えてるの何？」

カズ「あれ、見たことない？ツユクサだよ」

—ツユクサを加えるカズのアップ

シズカ「そ、そうじゃなくて、なんでそんなもの啜えてるの？」

カズ「おやつが欲しかったから、体育館の裏に生えてたから採って食べてるの。食べる？」

—握っている山盛りのツユクサを差し出すカズ

シズカ「い、いや...私はいいかな」

カズ「そう？なら全部食べちゃお」

—ツユクサを食べるカズのアップ

シズカM『彼はカズ。私の学校での唯一の友達。同じ文芸部の部員で、たまに一緒に帰ったりしてる。のんびりしててこんな感じでちょっと変なところはあるけど、優しくていい人だよ』

—カズと並んで歩くシズカ

カズ「何かその辺に美味しいもの生えてないかなあ。」

—周りをキョロキョロするカズ

シズカ「なんでいつもそうやって雑草とか食べてるの？お腹すくならお菓子でも持ってこればいいのに」

カズ「こっちの方が僕にとっては美味しいし、何よりタダだからねえ。草イチゴとかイヌマキの実とかあったらもっと嬉しいんだけど」

シズカ「そ、そうなんだ...何かあると良いね」

—顔をきつらせるシズカ

シズカM『まあたまに付いていけないところもあるけど、私の家の事情を知っていても何一つ態度を変えない数少ない人物でもある。そんな彼との時間は私の傷ついた心をいつも癒してくれる。』

カズ「そういえばさ。顔、ちょっと擦れてるけどどうかした？」

—シズカの右頬のアップ

シズカM『あ、さっきマリさん達に押し倒された時の傷かな』

シズカ「う、ううん...何でもないよ。」

シズカM『カズさんには私がいじめられていることは話していない。万が一にも彼を巻き込まないために』

カズ「あ、そう？ちゃんと手当しといたほうがいいんじゃない？」

シズカ「そうかもね。ありがとう。」

シズカM『みんなが私を借金のある男の子どもとして見る中、カズさんだけはこう言って受け流してくれた。』

—シズカの想像の中で肩をすくめるカズ

カズ「シズカさんの家庭の事情なんて、僕には関係のないことだからね。気に留めるだけ時間の無駄。」

シズカM『言い方はともかく、カズさんはこんな私にも優してくれる大切な友達だ。』

○それから数日後 学校の校舎裏

—シュウヤとマリとリコに暴力を振るわれるシズカ

マリ「ほら、早く金出しなさいよ！」

リコ「今日はちゃんとたんまり持ってきたんでしょね！」

シズカ「くっ！きゃっ！や、やめてください！」

—シズカの財布を奪い取り中身を確認するシュウヤ

シュウヤ「今日は五千か...まあまあだが、遊ぶ分には十分だな。おい、行こうぜ。」

—シズカの財布から金を抜き取って去ろうとするシュウヤ

カズ「一つアドバイスです。三人で五千円じゃ綺麗に分けられませんよ」

シュウヤ「は？」

—シュウヤが振り返ると、カズが立っている

シュウヤ「んだよカズか」

カズ「へえ、僕の名前知ってるんですね。興味のない人に呼び捨てにされるのは吐きそう  
なほど気持ち悪いですが」

シュウヤ「何の用だよ」

カズ「あなたに用はありません。僕が用があるのはシズカさんと、あなたが彼女から奪っ  
たものと、そこに生えているヨモギです」

—シュウヤに近づくカズ

カズ「シズカさんから取ったものを返してください」

—カズを睨みつけるシュウヤ

シュウヤ「おい、偉そうに言ってんじゃねえぞ。痛い目見たくなかったら黙って帰れよ」

カズ「分かりました。それでは最後に一つだけ」

—後ろを向いて大きな声で叫ぶカズ

カズ「先生！恐喝をしてる生徒がいます！助けてください!!」

—カズの叫び声とこちらにやってくる足音に驚くシュウヤとリコとマリ

カズ「おお、やっぱり先生は優しいですねえ。すぐに駆け付けてくれましたよ」

シュウヤ「ぐっ！この野郎、おい行くぞ！」

—シズカの財布を投げ捨てて逃げ去るシュウヤとリコとマリ。

カズ「ふう、これにて一件落着くと」

—シズカの財布を拾い、彼女に手を差し伸べるカズ

カズ「シズカさん大丈夫？」

シズカ「あ、う、うん…」

—カズの手を取って立ち上がるシズカ

シズカ「助けてくれてありがとう。でも何も先生を呼ばなくても…」

カズ「ああ、先生はこの時間は職員会議中、呼んでも来るわけないよ」

—校舎の角に落ちている自分のスマホを拾うカズ

カズ「僕のスマホから走ってくる音を流しただけ。いやあ、会話のタイミング合わせるの大変だったあ。」

シズカ「そ、そんなことしてたんだ」

カズ「美味しいもの探して校舎の周り散策してたらたまたま見かけてさ、一度こういうのやってみたかったんだよね」

ーシズカの財布を返すカズ

カズ「はい、どうぞ。それで、なんでこんな目に遭ってるの？無理に言ってとは言わないけど、君さえよければ聞かせてくれないかな？」

○それから数分後 とある公園

ー公園のブランコに乗り揺れるカズと手当をされたシズカ

シズカM『助けてもらったカズに対して何も言わないのは失礼だと思い、私は彼にこれまでされてきたことをすべて話した。』

シズカ「...というわけで、これまでもお金取られたり、今日みたいに暴力振るわれたりしてて...」

カズ「なるほどねえ、言ってくれば力になったのに。」

シズカ「カズさんに迷惑かけたくなかったの。それに今回は何とかなったけど、もし危ない目に遭ったら嫌だったし」

カズ「なあに、最悪その辺の大きめの石でも使えばあれくらいの人なら何とかなるよ。それよりもこんなに怪我してるんだから、自分の心配しないとでしょ？一応絆創膏持ってたからよかったけど、もう大丈夫？」

シズカ「うん、ありがとうね」

カズ「ちょっと暴力振るわれてるだけならまだしも、お金まで取られてるなんて確実にやりすぎだよ。先生に相談した方がいいんじゃない？」

シズカ「だ、ダメだよ！そんなことしたらお母さんに知られちゃうし、お母さんに迷惑かけたくないから」

カズ「けど、それでお金取られてちゃお母さんだって困るでしょ？」

シズカ「それは...そうだけどさ...」

—俯くシズカの隣で頭をひねるカズ

カズ「それならさ、僕が協力しようか？一人でいるより二人でいた方がいじめられにくいだろうし、何かあったら今日みたいなことすれば問題無いでしょ」

—驚いて手を振るシズカ

シズカ「えっ？いいよそんなこと！私の問題なのにカズを巻き込むわけにはいかないって」

カズ「いやぁ、僕の予想だけど、向こうからすればもう僕は敵、つまり何もしてなくても狙われる確率は高いんだよ。それなら二人で一緒にいれば問題ないんじゃないかなあって思ってたさ」

シズカ「でも...」

カズ「まあ特になにか特別なことをするつもりはないよ。いつもみたいに一緒に帰ったりすれば大丈夫でしょってだけの話」

シズカ「そう、だね。それじゃあ、よろしく」

カズ「うん。さてと、話し込んでたら暗くなってきちゃったね。そろそろ帰るか」

シズカ「うん」

—ブランコから降りて帰るシズカとカズ

○それから数日後の校舎

—学校が終わり、カズと一緒に帰るシズカ

シズカM『それから私はカズさんと一緒に帰ったりして、極力一人でいるタイミングをなくした。カズさんのアドバイスで先生の近くにいるようにして、彼らを遠ざけた。それで私の生活が大きく変わったわけではないが、その効果は絶大で、私はシュウヤさん達からいじめられることが激減した。』

—先生の近くで行動するシズカと、それを憎たらしげに見るシュウヤとリコとマリ

シズカM『カズのお陰で私は楽しい学校生活を手にいてることができた。彼は最高の友達で、これからも一緒にいられる。そう思っていた...』

○ある日の学校の教室 朝のHR

—教室で先生が出席を取っている

先生「今日は休みが...お、カズが休みじゃないか」

シズカ「え？」

—離れたところにあるカズの席を見るシズカ

シズカM『珍しいな、カズさんが休むなんて。具合でも悪いのかな？』

○その日の放課後 シズカの家

—ベッドに座りカズに電話をかけるシズカ

シズカ「ダメだ、全く連絡がない。かといってカズさんの家知らないから行けないし。大丈夫かな？」

シズカM『まあカズさんでも具合を悪くすることはあるだろうし、すぐに戻ってくるかな』

○それから数日後 教室

—誰もいないカズの席のアップ

シズカM『それから数日経った。カズさんは今日も学校に来ていない。先生も事情を把握しきれていないようで、詳しいことは話してくれなかった。』

シズカ「カズさん、大丈夫かな？」

—放課後になり教室を出るシズカ

シュウヤ「よお、シズカ。」

—後ろから声をかけられてシズカが振り向くと、シュウヤとリコとマリがいる

シュウヤ「こうやって話すのも久しぶりだよなあ」

—シズカに近づき彼女の肩を掴み笑うシュウヤ

シュウヤ「ずっと避けられてツラかったんだぜえ？それなりの慰めがあってもいいよなあ？」

シズカ「そ、それは...」

シュウヤ「久々に俺らと遊ぼうぜえ」

○校舎裏

ーシュウヤとリコとマリに暴力を振るわれる

マリ「このッ！さっさと金出しなさいよ！」

ーマリに突き飛ばされるシズカ

シズカ「きゃっ！やめっ、やめてください！いやあ！」

ーシズカのバッグをひったくり、中身を探るリコ

リコ「おっ、シュウヤ、財布見つけたよ！」

ーシュウヤに財布を渡すリコ

シュウヤ「へへっ、久々の臨時収入だな。カズの野郎を潰しておいて正解だったぜ。」

ー倒れながら首を傾げるシズカ

シズカ「え？どういうこと？」

ーにやにや笑うシュウヤのアップ

シュウヤ「なんだよ、知らなかったのか？最近アイツ学校来てないだろ？それは俺らがアイツを痛めつけてやったからなんだぜ」

シズカ「ええっ!？」

ー目を見開いて驚くシズカのアップ

シュウヤ「いやあ、ボロボロになったアイツは見ものだったぜ？」

シズカ「そんな...嘘だよ！」

シュウヤ「いや、嘘じゃないぜ。おいリコ、お前の撮った写真見せてやれよ」

リコ「OK！」

ースマホを操作してシズカに写真を見せるリコ

リコ「ほら、これ見なさいよ」

ーリコのスマホに映る血まみれのカズ

シズカ「な、なんてことを!!」

ー口を押えて真っ青になるシズカ

マリ「アイツが生意気なことするから、ちょっとお仕置きしてやったのよ。証拠は残していないし、ただの通り魔事件ってことになるだろうけど」

ー回想の中でカズを殴り飛ばすシュウヤ

シュウヤ「まあ、恨むんなら俺らに喧嘩売ったカズか、その原因のお前を恨むんだな。はっはっは！」

シズカM『そんな.....私を守ったせいで、カズさんがこんな目に...』

シズカ「カズさん...！」

ー立ち上がって走り出すシズカ

シュウヤ「あっ！おい待ちやがれ！」

○シズカの家

ー逃げて家につくと、スマホでカズに電話するシズカ

シズカ「お願い...カズさん、電話に出て」

カズ「ん？シズカさん？」

シズカ「カズさん！」

ーカズが電話に出て声を上げるシズカ

シズカ「怪我大丈夫なの？まさかシュウヤさん達に暴力振るわれてたなんて...」

カズ「ああ...」

シズカ「カズさん、ごめんなさい。私なんかを助けたせいで、あんなにひどいことされちゃって...私できることなら何でもするから、本当にごめん...」

カズ「シズカさん、用件はそれだけ？もう切っていいかな？」

シズカ「え？」

カズ「今は、君と話したくないんだ。というか一緒にいたくないから。それじゃあね。」

—一方的に電話を切るカズ

シズカ「そ、そんな……うう……」

—絶望で泣き崩れるシズカ

シズカM『こうして私はたった一人の友達を失った。でも、それは私のせいだ。私なんかを守ったせいで、カズさんはあんな目に遭った。嫌われて当然だよ。全部、私のせいで……』

○翌日の学校

—沈んだ表情で登校するシズカ

シズカM『はあ、昨日はロクに寝られなかったな。カズさんとはもう会えないし、学校に行くの、やめようかな…』

シズカ「ん？」

—シズカが顔を上げると、学校の周りに車がたくさんあり、人だかりができています

シズカ「どうしたんだろう？」

—人だかりの中に入っていくシズカ

シズカ「あの、すみません。何かあったんですか？」

—近くにいた学生に声をかけるシズカ

学生「ああ、なんでもうちの学校で暴行事件があったみたいなんだ。それで朝から警察やらマスコミやらが学校に来てるみたいだよ。」

シズカM『きっとカズさんのことね。今になってようやく発覚したんだ。でも、どうせ犯人は分からないままなんだろうな』

学生「あつ、今回の主役が出てきたぞ」

—校舎の玄関を指差す学生

シズカM『まさか、カズさん？』

—顔を上げたシズカの視線の先にいる、沈んだ表情のシュウヤとリコとマリ、そして彼らの親

シズカ「えっ!?シュウヤさん達!?どういうこと？」

学生「ん？だから言っただろ、暴行事件があったって。アイツらがやったらしいよ。それでその写真をSNSにあげたんだっけ。馬鹿だよなぁ。」

シズカ「ど、どういうこと？きゃっ!?」

—突然制服を掴まれて、後ろに引っ張られるシズカ

シズカ「な、なに？」

カズ「どうも、傷はこの前よりは大丈夫そうだね」

—シズカが振り向き、カズのアップ

シズカ「か、カズさん！一体どうしてここに？」

カズ「どうしてって、学生が平日に学校に登校するのってそんなに変？」

シズカ「あ、いや、そうじゃなくて...大怪我、してたんじゃないの？」

カズ「ん？見ての通り健康だよ？何の話？」

シズカ「シュウヤさん達に怪我させられたんでしょう？あんなに血まみれになって！」

カズ「ああ、その話かあ。それはねえ...ゲホッ！」

—突然地面に血を吐くカズ

シズカ「きゃああッ!?だ、大丈夫!?」

カズ「あっはっはっは！落ち着きなって、ただの血のりだよ。ブルーベリーの果汁にイタドリの汁を混ぜてから、ちょっと粘度足したもの。」

シズカ「え？な、何でそんなものを持ってるの？」

カズ「シズカさんと助けた時点で襲われるのは予測してたからね。血のり袋を制服とか口に仕込んでたの。殴られてもいいように衝撃吸収素材の衣服も来てね」

シズカ「そ、それじゃああの血まみれの写真って...」

カズ「顔の傷以外は全部僕の偽装だよ。顔の傷のだいぶマシになったし、もう大丈夫。」

—わけがわからず呆けるシズカ

シズカ「も、もう訳が分からない...あつ、そうだ！今学校が大変なことになってるの！実は...」

カズ「シュウヤさん達のやってきたことがバレて、警察とマスコミが押し寄せてる、でしょ？」

シズカ「な、何でそれ知ってるの？」

カズ「そりゃあ、彼らのことをリークしたのは僕だからね」

シズカ「えっ？でも、私が聞いた話だと、シュウヤさん達が自分でSNSに投稿したのが原因って...」

カズ「表向きはね。実際のところは僕が彼らのSNSアカウントを乗っ取らせてもらって、彼らの隠し撮り写真を投稿したの。」

シズカ「はあっ!?ど、どういうこと!?」

カズ「だから...って、ここで話すのはマズいか。こっち来て、どうせ今日はもう臨時休校だしいいでしょ？」

○公園

—ブランコに乗って揺れるカズとシズカ

シズカ「それで、一体何があったの？」

カズ「ああ。別に大したことじゃないんだけどね。」

シズカM『それからカズさんはこれまで何があったのかを話してくれた。』

○回想

—シュウヤとリコとマリに襲われるカズ

シズカM『カズさんはわざと目立って私を助けることで、シュウヤさん達に自分を襲うように仕向けさせた。そして対策をしたうえで彼らに襲われ、表向きは怪我による休校とした。』

—シュウヤがほかの学生をいじめているところを隠し撮りするカズ

シズカM『その目的は、シュウヤさん達に自分のことを警戒されずにこっそりと動くため。カズさんは休んでいる間に、シュウヤさん達がこれまでしてきた悪さの証拠集めをしていた。』

—自室で机に向かいパソコンを操作するカズ

シズカM『そして私が電話したあの日、カズさんはクラッキングでシュウヤさん達のSNSアカウントを乗っ取り、これまで集めた写真を投稿したらしい。』

—自分の家に警察が踏み込んで、驚くシュウヤとリコとマリ

シズカM『事件が公になり、シュウヤさん達の元に警察が駆け付け、学校での問題ということもあって学校に連れていかれた。そして今に至る』

—学校で先生と向かい合い俯くシュウヤとリコとマリ、彼らの親

○回想が終わり公園に戻る

—ブランコを揺らすカズ

カズ「...ってなわけで、その結果がさっきのどんちゃん騒ぎね。いやあ、人生で一度でいいからああいう光景見てみたかったんだよなあ」

シズカ「そ、それ大丈夫なの!? 思いっきり犯罪じゃない!?」

カズ「法治国家であるわが国では有罪かどうかは司法、裁判所が決めるんだよ。今現在僕は裁判所から有罪って言われてる？」

シズカ「...い、言われてないけど」

カズ「それじゃあ今のところは犯罪じゃないってことだね。クラッキングの遠隔操作はいずれバレるだろうけど、その辺の対策もばっちりだから大丈夫」

シズカ「そ、そういう問題かなあ...」

—呆れて頭を抱えるシズカ

シズカ「とにかく、無事で安心したよ。けど、なんでそれを私に話してくれたの？」

カズ「え？ だってある意味この事件の関係者でしょ？ それにこういうの話せる友達ってシズカさんくらいしかいないし」

シズカ「でも！ 私のこと嫌いになったんじゃないの？」

—悲しい面持ちで伺うシズカ

カズ「は？僕そんなこと言ったっけ？」

—立ち上がって叫ぶシズカ

シズカ「だ、だって、私と話したくないって、一緒にいたくないって言ってたじゃない！」

カズ「ああ、だってクラッキングしてる最中に電話かけてくるんだもん。やってることがやってることだし、作業に集中したかったの。だからひと段落するまでしばらくは一緒にいられないって意味だったんだけど、何か勘違いしてない？」

シズカ「あ、ああ...そういうこと...」

—脱力してその場にへたり込むシズカ

カズ「おっ、学校から正式に今日は臨時休校だってお知らせ来たよ。それじゃあ僕は帰ってため込んだアニメ一气見するかあ。シズカさんも一緒にどう？」

シズカ「え、あ、う、うん...行くよ」

—公園を出て、カズの家に向かうカズとシズカ

シズカM『こうして私は二度と学校でいじめられることはなくなった。』

—少年院に入るシュウヤとリコとマリ

シズカM『シュウヤさん達はこれまで私だけでなく色んな人をいじめていて、中には大怪我を負わせた人も少なくなかった。そして今回のカズさんのこともあって少年院に入ることになったらしい。』

○それから数日後

—カズと一緒に登校するシズカ

シズカM『カズさんはといえば、数日経っても特に何も変わった様子は無い。警察に捕まることなく今日も私と一緒にのんびりと過ごしている。警察に言うべきかどうか迷ったけど、今回は目を瞑ることにした。私を助けてくれるための行動だったわけだし、何より彼は私の大切な友達だ。彼がこれ以上悪いことをしないっていうのはなんとなく分かってる。だから私はカズさんと一緒にいる。今も、そしてきっとこれからも。』